

創造農村ワークショップ「地域資産と創造農村」 in 長野県木曾町

<創造農村シンポジウム 2013年8月25日収録>



■主催者挨拶 文化庁環境政策課長 清水明氏

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました、文化庁の政策課長の清水と申します。文化庁を代表いたしましてご挨拶をさせていただきます。

今回『第3回創造農村ワークショップ』ですが、佐々木先生、パネリストの先生方、全国各地からご参加の皆さん、本当にありがとうございます。また開催にあたりまして、準備にあたってこられた一般社団法人ノオトの皆さん、そして何よりも田中町長はじめ木曾町の皆さんのご尽力に、この場をお借りいたしまして感謝申し上げます。

昨日この木曾福島の宿場町、開田高原などを視察し、歴史あるクラシックの「木曾音楽祭」を鑑賞させていただきました。その後の夕食会では、木曾のお酒や地元の素材をふんだんに使った料理をいただきながら、木曾町や全国各地で創造農村、文化・芸術創造都市計画づくりに取り込んでいらっしゃる皆さんとお話し、各地で大変いろいろとご苦労しながら、熱心に取り組んでいる皆さんのお話を伺う事が出来て、本当に大変よかったと思っております。今日、このワークショップで、全国の皆さんとのネットワークを広めていくことが出来ることは参加者の皆さんにとっても、また私どもにとっても大変嬉し

い事であると思っております。

文化芸術の持つ創造性を活かして、産業振興や地域活性化に取り組んでいる創造農村、文化芸術創造都市というのは、大変重要な取り組みだと思っております。文化庁としても平成19年度から、文化庁長官表彰の文化芸術創造都市部門といったものを設け、その後もこの事業でありますとか、ネットワーク化の推進などに取り組んできており、木曾町も平成22年度にこの文化庁長官表彰の対象になったところでございます。

文化庁といたしましては、今後もこの取り組みは重要だと思っております。実は下村文部科学大臣が文化芸術の力が大事だということで、今年の5月に文化芸術立国実現のための懇談会といったものを立ち上げ、文化芸術立国の中期プランを作成しようと、今進めているところでございます。

2020年までに、日本が世界の文化のハブとなる事を目指そうと、文化予算についても倍増していきたいとかなり意気込んでいるところでございます。そのプランの中で、文化の力で地域を元気にするというのが大きな柱の1つで、文化庁としても、文化芸術創造都市推進事業について一層拡充したいと思っております。また、芸術文化、文化財を担当す

る部署で、創造都市・創造農村の取り組みについて別枠を設けたり、優先的に採択したりとか検討しているところがございます。こういったことを通じまして、全国の皆さんの活動につきまして、支援出来たらと思っております。

本日は、この後のシンポジウムにて、各地の取り組みについてお聞きするとともに、意見交換などを通じ

て、このセミナーが、創造都市・創造農村のネットワークを広げる大きな力になれば幸いだと、思っているところがございます。

簡単ではございますが、これで主催者としてのご挨拶とさせていただきます。皆さん、よろしく願います。



■開催地挨拶

木曾町長／木曾広域連合長／木曾学研究所顧問 田中勝己氏

皆さん、おはようございます。只今、ご紹介をいただきました、木曾町町長の田中と申します。木曾学研究所の顧問という立場でもあります。本日の文化庁主催ではありますが、町も主催者に加えていただきましたので、ご挨拶を申し上げたいと思います。

ようこそ木曾までお出で下さいます、心から歓迎申し上げます。

私が佐々木先生を知ったのは、今から10年ほど前の平成15年秋で、大分に向かう飛行機の中で、出会いました。勿論、本人に出会った訳ではありませんで、私は飛行機の中で、井上ひさしさんがご出身の山形県で開いておられた生活者大学校での講義録が1冊の本になった『あてになる国のつくり方』を読んでおりました。

その本の中に、イタリアのポローニャの街を引き合いに出したまちづくりが紹介されており、末尾に「詳細は『創造都市への挑戦』佐々木雅幸」と書かれてありました。これが私の最初の出会いでした。大分に着いてすぐに、家内に電話をいれて本を直に取り寄せるお願いをしました。これが先生の書物と出会った最初であったと思います。

それから新しい年が明けた1月か2月でありましたが、突然、先生の訪問を直接受けることになりました。先生はその当時、WILL国際文化交流研究所というNPOの理事長をやっておられました。そのNPOの理事でこの町出身の太鼓センターの理事長をやっておられる東さんが、佐々木先生と一緒に訪

ねて来られて、先生を紹介していただきました。私がビックリして「先生の本、読みました。」と言ったら、先生もビックリされてですね、鞆の中から3冊出されまして、私が「それです。」と言いました。それからいろんな懇談をさせていただきました。

創造都市論という考え方に共感しておりまして、佐々木先生に「先生、これは都市の問題だけではなく、農村でも同じことではないでしょうか？」と申し上げましたら、先生は「まったくその通りです。」と言われました。私は「実は、この町で木曾学研究所というのをつくって、こうした運動とまちづくりを進めたい、今までもやってきましたけれども、こういう方向でやっていきたい」という話をしますと、先生から励まされて、非常に感動したことを今でも覚えております。その年の秋、平成16年9月に、木曾学研究所設立を目指して、第1回の木曾学研究所設立総会を開催しまして、佐々木先生においでいただいて記念講演をしていただきました。

その時のパネラーは、今日来られておられる前都留文科大学教授の田中夏子先生、もう故人となりましたがバイオリン製作者の木曾町でバイオリン作りを始めたという、陳昌鉉先生。昨年お亡くなりになりましたが、東洋のストラディバリといわれた方です。その後も毎年、1回～2回の講演会を開催し、多才な皆さんにこの講演会にお出でいただきました。哲学者の内山節先生、故人になりましたが木村尚三郎先生、湯布院で、まちづくりをやっておられる中谷健太郎先生、富山和子先生。今日、お出

でになっているのではないかと思うのですが、信州大学の加藤光一先生、四国・馬路村の農協組合長の東谷望史先生、岡田知弘先生。時松辰夫先生、滝坂信一先生、向山明孝先生、竹内敬二先生。いろんな多才な皆さんに、この間にお出でいただいて8年間に10回を数えました。

この他に、公民館の講座として年10回ほど、この木曾に住むいろんな研究者の皆さんに、お願いをして「木曾学講座」をずっと開いて参りました。町ではこうした温故知新の学習だけでなく、実際の事業をしようというふうを考えて町の活性化を願って、創造的なまちづくりということをお願いしている活動をやって参りました。これについてはパネルディスカッションの方で、報告させていただきたいと思っています。いろんな文化でいえば『木曾音楽祭』。全国に例のないような「徹底した住民が主人公のまちづくり」、「安心して暮らせるまちづくり」、

「交通システムの確立」の中身については、事例報告の時に話し申し上げたいと思っています。

私の町長在職16年間は、創造都市論の理念に励まされながら、自分なりに歩いてきた道程ではないかと思っています。その間、佐々木先生が開いていましたゼミにも時々参加をし、長い間ご指導いただいたことに心からお礼を申し上げる所存です。

私も76歳、本当に物忘れが激しくなり、これでは町政にも町民にもご迷惑をおかけするということを考えて、この11月に勇退をするという決意表明した次第であります。

私の町長最後の時期に、こうした機会を、文化庁それから佐々木先生の方から、木曾町にいただいたことを本当に心から感謝申し上げて、私の歓迎の挨拶とさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

(1) 事例報告



群馬県中之条町 入内島道隆氏
前中之条町長／NPO法人ぐんまCSO理事長

今日は、「アートによるまちづくり」というテーマでお話したいと思います。

中之条町は群馬県の長野県と新潟県と接しており、2011年から「日本で最も美しい村」連合に加入した町です。

今、全国各地で、ビエンナーレ、トリエンナーレなどが行われています。有名なところだと、「越後妻有トリエンナーレ」と「瀬戸内国際芸術祭」などですが、中之条もそういった形のアートイベントをやっております。

地方にとって「過疎とどう立ち向かうのか」というのは大きな課題です。やはり「若者がどんどん出ていってしまう」ことが、過疎の最大の原因で、そのことによって、どんどん衰退していってしまう。逆に言えば、若者が戻ってくるような政策をとれば、地域がまた元気になってくると言えます。

東京が元気なのは、全国から優秀な人材が東京に流れていったからです。その逆の流れをつくれれば地方も再生できるんじゃないかなと思います。その方法はたくさんたくさんあると思いますが、私がとった方法はアートイベントでアーティストやクリエイターを移住させるという政策です。

■住民主体の芸術祭

ビエンナーレを始めたのは2006年、町に関係のあるアーティストと一緒に、越後妻有の「大地の芸術祭」というのを見に行ったのがきっかけです。一緒に行った彼らが「中之条でもできますよ」という話からスタートしました。

第1段階のアートツーリズムから説明します。2006年に新潟の「大地の芸術祭」を視察して、役場スタッフは「1年以上、準備期間を置いてやりたい」という話をしていましたが、アーティストは

「直ぐやりたい」ということで、準備期間が半年という状態でスタートしました。

ポスターも全部アーティストの手作りで、非常にセンスのいいものができたと思います。最初のときの宣伝チラシを作ってくれたのは、総合プロデューサーの山重徹夫さんで、彼の作ったチラシのセンスによって、中之条ビエンナーレにも多数の入場者がありました。

地域の公民館に、ゲートボール場があり、お年寄りには毎日ゲートボールをして、ゲートボールが終わると、公民館中の現代アートを見ていきます。「よく分からないんだけども、毎日見て帰るんだ」と言ってました。群馬県でアートイベントを大々的にやっているということがなかったものですから、非常に珍しがられてメディアなどに随分いろいろと取り上げていただきました。

1, 2回目は、アーティストのボランティアによる非常に少ない予算で運営されておりました。



2回目となる2009年はちょうど、越後妻有トリエンナーレとかぶっていました。北川フラムさんのところにお邪魔し、「中之条ビエンナーレ」の方向性などについて相談していました。

この時の実行委員長は普段住んでいるのは神奈川でしたが、準備期間の1年間は中之条に滞在し、手弁当で自分の貯金を崩しながら実行委員長をしてくれました。

アーティストが作品づくりのために、町に滞在しますので、滞在する場所を確保するために、町にあるキャンプ場を「芸術の森」にと、条例改正しました。

場内の管理棟が、東京からアーティスト仲間がやって来て、料理を作って賄うレジデンスになり、



そこではバーベキューをしたり、アーティスト同士の交流が盛んでした。

町中の空き店舗をつかった「ダンスホール」(写真)んという作品で、このダンスをしているのが商店街の人達です。みんな自分の顔がダンサーになっていますね。町長室も作品の展示会場に貸してくれないか、と言われ、週に1回2時間だけ貸出して、私が来場者に説明していました。奥にいるのは秘書ですが、いろいろ大切なものがあるものですから、本当は困るんだと睨みをきかせています。

1回目は「こんなもんかな」と見られていましたが、2回目は「これはかなり本格的だな」という評価を得られるようになりました。メディアに取り上げられる数も増えました。

■進化する中之条ビエンナーレ

2011年、3回目の実行委員長が、写真の彼女(写真)です。彼女は町出身の人で、東京に出て行ってたんですが、ビエンナーレで町が元気になり始めたために、2回目から戻って来て、実行委員に加わり3回目は実行委員長となりました。このように1ターンだけでなく、Uターンのメンバーも増えてきました。





3回目は現代アートだけでなく、いろんなイベントも入れていくようにして、回を追うごとに進化させています。ちょうどこの頃、六合村が合併したので、展示会場も相当多くなりました。これは六合村にあった湯本家という古い医者の家で高野長英を匿っていた家です（写真）。その当時、高野長英は2階にいて、追手が来たときにすぐに、裏に逃げられるような造りになっていました。作品を見る順番を実際の逃亡ルートで見させていただきました。

音楽イベントでは、地域の伝統文化を合わせて、ビエンナーレの中で楽しんでいただき、ワークショップもやりました。テレビの取材等も結構入って来ていました。

3回目の予算が1,900万円。経済効果は5億円ぐらいです。入場者数が35.8万人、作家さんが125人、会場が43と、かなり規模を拡大しています。規模が拡大することによって、遠方から来る方々は2泊くらいしていただいて全部を見て回っていただきますので、地域経済にも貢献するイベントだと思います。

■クリエイティブな人材に移住してもらおう

アートイベントとして成功しても、それだけではクリエイティブな町にはなっていきませんので、



アーティストがどうしたら移住してくれるかということが次の課題でした。

1回目から参加した韓国人のアーティストは、1回目が終わったときに、町に移住して来てくれました。とはいえ、なんらかの生活基盤がないと、彼らもただ単に移住してくれと言っても、移住できません。

ちょうどその頃、町の真ん中に、1,000坪の空き地があり、その有効活用という課題が随分前からあがっていました。私が町長になってから、この1,000坪を取得して再開発して、そこにつくったのが「つむじ」という施設です（写真）。この施設の運営をアーティストの人達に、任せることによって、彼らがここで生活できる基盤をつくったわけです。テナントの選定からイベント、パンフレットの作成と運営全部を彼らにまかせたことで、センスの良い空間ができ上がりました。

こういった施設ができて、「ふるさとが楽しそうになってきた」ということで東京などから町に戻って来る人もいました。この施設をつくる時に目指したのが中心地に人を呼び込むことでした。アメリカの事例などを調べましたが、バーリントン、ボルダーでは、車優先から人中心のまちづくりによって、人集めをしています。中之条町もそのようにできやってみようということになったのです。

「つむじ」オープニングのときには、中心部を歩行者天国にして、イベントをしました。メンバー達が仮面を作り、仮面舞踏会をやりました（写真）。

「つむじ」ではアーティストの1点ものや、デザイナーが作ったものを販売しています。アーティストが移住することで可能になっていることです。六合村には、伝統的に伝わる「こんこん草履」があり

ます。今までは無造作に並べて売っていましたが、これをアーティストが展示すると写真のようになります。これはオープニングのときに一気に売り切れたようです。段ボール箱に入れて売っているのと、アーティストが展示に手を加えて売っているのでは随分違うと思います。

看板ひとつにしても、アーティストに頼むと、随分違った風に見えるわけですね。アーティストがいればこういったことが自然にできでき上がってくる効果があります。

■クリエイティブな人材をつなぎとめるという課題
「中之条ビエンナーレ」が成功して、アートイベントとしては上手くいきました。クリエイターに移住してもらうというシステムも整い、上手くいきま



徳島県神山町 大南信也氏
NPO法人グリーンバレー理事長

神山町はサテライトオフィスの町です。私が代表を務めるNPO法人グリーンバレーが何をやっているのかをご紹介します。簡単に言えば「仕事がないから移住して来られない。仕事がないから故郷に帰って来られない」と言わせないようにしようということです。

■サテライトオフィスの町

例えば地域で生まれた子ども達を、サテライトオフィスに連れていきます。「周りの大人たちは『神山には、仕事がない』と話しているよね。でもこのサテライトオフィスで働いている人たちは、何のために神山に来ているのだろうか？」「しっかりと仕事をやってるだろ。ということは神山にも仕事があるということだ」「こんな職種に就けば、君らも神山に帰って来られる」ということを子ども達に伝えます。今までは「一生懸命勉強して東京や大阪の会社で働きなさい」と言って送り出してきましたが、「こういう職種なら神山に帰って来られるから、頑張っ勉強しろよ」というような送り出し方が、できる

した。クリエイターはある意味「若者、バカ者、よそ者」を全部、一人で兼ね備えています。若者であり、外からの視点もあり、新しいことが発想できるという人達なんです。

ただ、そういった異質の人達を地域が受け入れられるかというのが、最終的に一番の課題なのではないかと思います。私も、そういった人達を、役場の嘱託職員にしたり、委託したりしていますけれども、「なぜ地元の人を使わないで外から来た人を使うんだ」と言われます。そこを乗り越えられるかどうかが一番の課題だと思います。

私が町長を辞めてから、残っているアーティストが少なくなっている。そういったところが今後の課題だと思います。

んじゃないかと思います。

一方、地域における世代間の循環だけで田舎が続いていけるかという、これはもう不可能になっています。必ずよそから入って来てもらう必要がある。特に若い人たちが必要です。その時にもまた仕事の問題が、頭をもたげます。「うちの町には雇用がない、仕事がない。だから、移住者を受け入れられない」という話になります。この問題には「ワーク・イン・レジデンス」という手法で解決を図ります。仕事がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらえば、うまくいくのではないかと思います。



■「ヒトノミクス」から考える地域の未来

「日本の田舎をステキに変える！」というのが、グリーンバレーのミッションです。最近「ヒトノミクスから考える地域の未来」ということでやっています。「アベノミクス」の向こうを張りまして、「ヒトノミクス」という言葉を広めています。今、神山がなぜ、注目されているのか。それは、過疎の町で起こった二つの異変の所為だと思います。

一つ目は、2011年度の社会動態人口（転入者－転出者の数）の異変です。神山町は1955年に生まれ、ずっと転出超過が続いておりました。2007年に神山町移住交流支援センターが設置され、その運営が民間住民団体であるグリーンバレーに委託されました。これに並行する形でウェブサイトの「イン神山」を作り、「神山で暮らす」のコーナーで古民家情報を積極的に発信し始めました。これらが功を奏したのか、町の歴史始まって以来初めて転入者が転出者を12人上回ったのです。

もう一つは、2010年の10月以降、ITベンチャー企業など10社がサテライトオフィスを設置したり、本社を神山に移転して来たり、さらには新会社も生まれてきていることです。地理的な立地を見てみますと、徳島空港から徳島市内にある県庁まで車で約20分、そこから約40分で神山町に到着できます。

■アドプト・プログラムとアーティスト・イン・レジデンス

1997年に徳島県新長期計画が発表されます。神山を中心とした地域に、「とくしま国際文化村」を作るというものでした。その新聞記事を見た時に、「これから10年後、20年後を考えれば、町や県が作る施設も必ず住民自身が管理・運営する時代が来るだろう。与えられたものだったら上手く運営できないだろう。そこで、住民の思いを反映したプランを作り、逆に徳島県に提案をしよう」と考えて動き始めました。最終的に「環境」と「芸術」の二つを軸に据えて、「環境」については、全国で初めて



アドプト・プログラム（アメリカ生まれの道路清掃プログラム）をスタートさせることになりました。

もう一つは、「国際芸術家村」を作ることです。その手段としてアーティスト・イン・レジデンスを取り入れました。これは1999年から続いており、2000年から2004年まで、文化庁から助成していただきました。神山アーティスト・イン・レジデンスは、3名の芸術家を神山に招き、約3カ月間、滞在しながら作品制作し、展覧会での発表を終えて帰国するというプログラムです。その期間中、住民が芸術家の制作の支援を行います。これは今年15回目を迎えます。

神山町にやってきたアーティストたちは様々な作品を残していきます。例えば、「隠された図書館」。町には図書館がありませんでした。そこで、事前のリサーチでそれを知ったアーティストはアート作品で図書館をつくったわけです。

さて、「アートによるまちづくり」には二つの方法があるように思います。作品を見学に訪れる観光客をターゲットにするものと、作品の制作に訪れるアーティスト自身をターゲットとするものです。

多くの場合、見学に訪れる観光客を獲得することを目指します。そのためには、有名なアーティストに来てもらい、残していった作品を集積していく必要があります。ところが神山のプログラムには2つ弱点があります。

一つ目は、潤沢な資金を持たないこと。年間予算は約350万円、うち140万円が神山町からの補助金です。したがって、高名な芸術家に来てもらうことは無理です。

二つ目は、町のおじさん、おばさん達が始めたプログラムなので、アート教育をきちんと受けた専門家がないこと。だからアートを高めることは不可能なわけです。

そこで、こう考えます。四国はお遍路さんが往来する土地柄でもあり、お接待の文化を持っています。これらの特徴を活かすことによって、アートは高められなくても、アーティストは高められるだろうという方向に進んでいきます。そこで、制作のために訪れる芸術家をターゲットにします。

例えば、欧米のアーティストたちに「日本へ制作に行くなら神山だよ」と言われるような場所を作ろう。そのためには、神山を磨いて「場の価値」を高めて、芸術家たちの滞在満足度を上げていくことに力を注いでいます。このプログラムを7、8年続けてきた頃、「そろそろこの『制作滞在支援』をビジネスに転化していけないのか？」「町の経済を動かすようなものに変えられないか？」と考えるようになりました。

■ウェブサイト「イン神山」と古民家情報

そこで2007年から2008年にかけて、総務省の補助金を使って「イン神山」というウェブサイトを作りました。制作にはデザイナーの西村佳哲さん、トム・ヴィンセントさんの力を借りました。当然、アートでビジネスを起こしていこうという思惑を持っていたので、アート関係の記事の作り込みを丁寧にやっていました。

ところが2008年6月4日にこのサイトをオープンすると、一番よく読まれる記事が、アート記事

創造の森アートウォーク



ではなく、「神山で暮らす」でした。「このお家は2万円で借りられますよ」「この家、傷みが激しいから薪ストーブを入れても大家さんは許してくれますよ」といった古民家情報へのアクセス数が、他の情報より5倍から10倍多いという現象が起こりました。もともと神山は、1ターン者がほとんどいなかった町です。私の知る限り、1980年代初頭に越してきた2組以外に例がありません。ところがこの「神山で暮らす」から移住需要が一気に顕在化していきました。

その発端となったのが、やっぱりアーティストの移住です。1999年に「神山アーティスト・イン・レジデンス」を始めた2、3年後から、引き続きこの町に住みたいというアーティストたちが現れます。毎年1組ずつくらいですが、その人たちのための空き家探し、所有者の紹介、引っ越しのお手伝いなどをする間に、グリーンバレーに移住支援ノウハウが蓄積されていきました。そんな折に神山町移住交流支援センターが設置され、その運営をグリーンバレーが担うことになりました。このことが新たな展開を生んでいきます。

■ワーク・イン・レジデンス

ワーク・イン・レジデンスというプログラムをスタートさせました。これは、「地域に仕事がないのなら、仕事のある人に移住してもらえば、この問題は解決する」という考え方です。具体的には、町の将来にとって必要と思われる「働き手」や「起業家」を、ピンポイントで逆指名しようと考えました。

例えば「神山には石窯で焼くパン屋さんがない。でも、そういうパン屋さんができたら町民の皆さんも喜ぶよね」ということで、ある空き家はパン屋さんをオープンする人だけに貸し出す。最初から入口を絞ってしまいます。

さらには、「これからインターネットの時代になるのに、神山にはウェブデザイナーがいない。じゃあ、この家にはウェブデザイナーに入ってもらおう」ということで、入口を絞る。そうすることで、町をデザインすることができるようになります。

商店街再生プロジェクト(空家町屋)

東京藝術大学建築科研究室連携事業



1955年の神山町にある上角商店街、当時は、商店の他にも石屋、酒屋、桶屋といった職人もいて、ここで商売していました。ところが、だんだん時代に合わなくなり、店を閉めてしまう。ワーク・イン・レジデンスを始める前には、38軒あった店が6軒にまで減っていました。そこにワーク・イン・レジデンスで移住者を誘致していきました。パン屋、カフェ、日用品店、洋菓子製造所がオープンし、ウェブオフィスも入ってきました。こうして空き店舗が出るたびに、住民にどんな店が必要なのかを尋ね、そこを埋めていきます。これを連続的に繰り返していくと、ほとんどコストをかけずに商店街の再生ができることになりました。

■空家町屋プロジェクト

そうした中で新規事業の「空家町屋プロジェクト」を始めます。商店街にある長屋の一角を、グリーンバレーが出資する200万円と地域活性化センターの助成金200万円を合わせて、合計400万円の資金で空き家を改修するというものです。

通常、空き家は借りた人が改修工事を行います。ところが水回りなどの改修には、直ぐに100万とか200万円単位のお金が必要になってきます。神山に入って来るクリエイターやアーティストは、そんな多額な初期費用を賄うことはできません。そこで、グリーンバレーが改修を行い、家賃に上乗せし、新規入居者にサブリースする形で貸し出すプロジェクトを始めたわけです。この改修工事を主体的に進めてくれたのは、東京藝術大学建築学科の学生や院

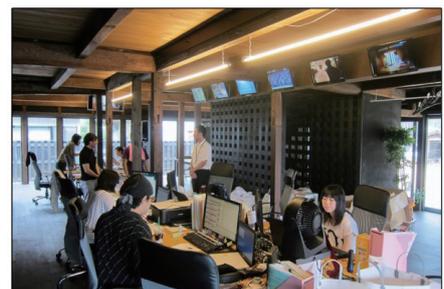
生、助手、さらに首都圏の建築系学生達でした。延べ約250人がほぼ手弁当で手伝ってくれました。このようにして「ブルーベアオフィス神山」ができました(写真)。この改修のプロセスの中で、サテライトオフィスが生まれてきたのです。

何が起きたのかを話すと、この改修工事には坂東幸輔さんと須磨一清さんが建築家として加わってくれました。そして、たまたま須磨さんが、後に神山初のサテライトオフィスを開設することになるITベンチャー企業の寺田親弘社長と同級生だったということです。寺田さんは、かつて、三井物産に勤めていた時代に、シリコンバレーでの勤務経験があり、その時にシリコンバレーでの新しい働き方、テレワークの実態をつぶさに見てきていました。帰国後、退社し、「働き方を革新する」というミッションでSansanを起業します。

2010年9月、寺田さんは須磨さんから「四国の山の中で、長屋をオフィスに変えるプロジェクトをやっている。その神山という町は、各家庭に光ファイバーが引き込まれていて、ネットの速度がめちゃめちゃ速い」という話を聞き付けて、早速視察に訪れたのですが、ほぼ即決でサテライトオフィスを設けたいという話になりました。

寺田さんは一旦東京に帰り、社員に神山サテライトオフィスの構想を打ち明けたところ、思いのほかたくさんの社員から賛同の声が上がり、具体的に「10月14日から、男性社員3名を神山に送り込みたいので、よろしく頼む」と連絡が入りました。そのため1週間で空き家所有者の同意を取り付け、残りの1週間で、荷物整理や掃除を終え、10

プラットフォーム「神山センター」



正規社員4名雇用!(15名追加募集中)

月14日には開発チーム3名を迎え入れたというのが神山におけるサテライトオフィスのスタートでした。

今、神山にはたくさんの人が視察に来られていますが、「シリコンバレーかどこかで、サテライトオフィスというアイデアを見つけ、それを神山で始められたんですよね?」と考えられている人がほとんどです。しかし、本当はサテライトオフィスという言葉さえ知らなかったのです。神山にやってくる人達の想いやアイデアを住民が一緒になって実現していたら、結果としてサテライトオフィスが生まれたということなのです。

その約1年後、NHKの番組『ニュースウオッチ9』や『クローズアップ現代』で、ITベンチャー社員が小川のせせらぎに足を浸けて、東京の本社とテレビ会議をしながら仕事をする姿の映像が流れ、「日本にもこんな場所があった」とIT関係者に衝

サテライトオフィスはどのように生まれたか?



撃を与えたわけです。その1枚の映像が神山を変えてしまいました(写真)。

しかし、サテライトオフィス誘致とは言っても、積極的に誘っているわけではありません。「来てください」とは、どこのサイトにも記載していません。マスコミや口コミ情報で知った人達が、月に何人か必ずやって来てくれます。

■商店街再生

「(株)プラットフォーム」という会社が初めて神山を訪れたのは、2012年4月です。そこからトントン拍子で話が進んで、古民家と周辺の土地を購入しました。2013年1月より改修工事に着手し、7

月にオフィスを開業しました。

このオフィスはガラス張りになっていて、その中でみんなが仕事をしています。建物の外周には2.5~3mくらいの縁側が付いており、地域に開放されています。また夜になるとパーティがたびたび開かれて、住民や他のサテライトオフィスで働く人達の交流の場ともなっています。ここでは、正社員4名が雇用され、うち2名は神山町内の新卒女子です。現在、社員を追加募集中で、1年後には20数名の若者が働くオフィスになります。

農機具小屋を改修したサーバー棟には超高速の1GB回線が引かれ、土蔵を改修した「蔵オフィス」は、開発チームのような静かな環境が求められる業種に使われます。そして夜を迎えると、幻想的な空間に生まれ変わります。この情景に触れると、六本木ヒルズとかミッドタウンで働いているITベンチャーの人たちは「ああ、こんな所で仕事がしたい」とノックアウトされるわけです。また、2014年にはアーカイブ棟が完成します。ここでは4K、8Kと呼ばれる次世代の超高精細テレビ規格の実証実験の場が西日本に初めて生まれることになります。

プラットフォームがサテライトオフィスを構えているのが寄井商店街です。長い間空き店舗が目立っていたこの商店街が活気づき始めています。近くには改修中のビストロが11月末に完成します。また、映像作家や映画の予告屋に加えて、グーグルの仕事をされている人がサテライトオフィスを開きます。さらに、演出家の女性も事務所を置く予定です。

このように商店街の空き家にクリエイターやサテライトオフィスを誘致し、もう一度人の流れを取り戻していきます。そうした中で、次はどのような職種が必要かを見極めて、ワーク・イン・レジデンスで最適な人材を集積していくというサイクルで、商店街の再生を進めています。

NTTドコモのCM「森の木琴」やNHK大河ドラマ「八重の桜」のタイトルバックを制作した「ドロージョーイングアンドマニュアル」もオフィスを置いており、この秋くらいから本格的に動き出します。このような第一線の会社が来ることによって、さらに

力のあるクリエイター達を呼び込むという循環が生まれることになると思います。

■クリエイティブな人が集まる「せかいのかみやま」

神山町はまったくアートの素地がなかった場所です。ここに1999年突然、現代アートが舞い降ります。当然地域の人達も「わけのわからないことをやっても、何にもならない」と冷たい目です。これは活動に関わっている人間には辛いことですが、都合の良い面もあります。わけがわからないことだから逆に邪魔をされません。その結果、自分達の思い通りに育てられます。そして、そのようなわけのわからないことでも、10年、15年と続けていけば、地域の魅力を形成していきます。「神山って面白いよ」ということになれば、そこにクリエイティブな人達が集結し始めます。今、神山ではこの連鎖と循環が起こっています。人が人を呼ぶ。さらに、旧住民と新住民の間では知恵と経験の融合が起り、自然発生的に新しいものが生まれています。こちらで何

兵庫県篠山市 金野幸雄氏



一般社団法人ノオト代表理事

私の主な活動拠点は、兵庫県の丹波篠山です。空き家の活用というのをきっかけにして、まちづくり、地域再生をしています。古い建物だけど何か魅力がある建物が、創造農村といわれる地域にたくさんあり、しかもそれらが隅っこに追いやられて、ほったらかしにされています。そこで、それらを上手く使っていくのがこれからの日本再生のキーになるのではないかと、本気で思っています。

■地域資産に光を当てる

よく「地域資源」と言われますが、我々は最近では、経済的な意味に加え、文化寄りのイメージがする「地域資産」という言葉を用いています。地域資産とはなにかということ、我々の団体を作った4年ぐら

「せかいのかみやま」の風景



クリエイティブな人が集まる良質な価値創造の場

もコントロールする必要はありません。勝手にやり始めるという状況です。

地域づくりの要諦は、「そこに「何」があるか」というのではなく、どんな「人」が集まるかです。「人」が集まることによって、「何」はそこから生まれてくるのではないかと思います。

クリエイティブな人が集まる良質な「価値創造の場」を作れば、そこから「モノ」はいくらでも生まれます。まず人が集まる心地よい場を作る。これが今の神山の歩んでいる方向です。

い前に議論しましたが、だいたい私共が考えた地域資産とは、食、祭、古民家、工芸などです。こういうものに光を当てると、何か地域が輝きだして、人も来るのではないかと考えました。これらは全部、今の日本社会が捨てようとしているものです。皆さんもお気づきでしょうが、古民家、在来作物、伝統工芸とこれ全部ブームが来てます。

たたみ・土間・縁側・客間
いろり・おくど
来客・もてなし・しつらい
陶磁器・漆器・布・和紙・木工・竹細工
里山・農地・薪炭
虫の音・鳥の声
気配・間・畏敬の念
五感・祈り・土地の神様
食文化
集落・商店街・まつり
コミュニティ・子ども・家族

NOTE

懐かしくて新しい日本の暮らしを提案します

集落、集まって暮らすということ
農園、日々営むということ
里山、精霊を宿すということ
酒蔵、文化をつなぐということ
商店街、心を通わすということ
これからの日本、本当の豊かさとは…



■ノオトのコンセプト

懐かしくて新しい日本の暮らしを提案

一般社団法人ノオトがつくったコンセプトが、「懐かしくて新しい日本の暮らしを提案します」。いろいろキーワードがありますが、集落、農園、里山、酒蔵、商店街といったものに、価値があるということです。これらも日本が捨ててきたものなのです。集落は、集まって落ち着くということなんで、日本人の農業をベースとした暮らし方というものを表現していると思うんです。

今の日本社会というのは、隣の人のことは知らない方がよいという社会をつくらうとしているわけで、もう一度、集落という一緒に集まって暮らすということに、光を当てようとしています。

農園は、農場と違いまして、見渡す限りのとうもろこし畑ではなく、棚田でお米があって、畑では篠山ですと黒豆とか、お野菜が採れ、栗、柿の木、しいたけのほだ木をつくるためのクヌギの林、せせらぎにはワサビが自生している。生活の糧が全部身の回りにある農園というのは、案外あります。たまに、お肉が欲しいと思うと、いのししや鹿が近場で駆除に困るぐらいたくさんいますので、手に入る。そういう身の回りですべて済んでしまうという豊かさに、光を当てようと考えています。

これは冗談みたいな話ですが、もし我々がそういう暮らしをしたら、TPPも関係ないわけです。自分の周りに全部あるんですからね。国際的な情勢も関係ないということになります。

私は「どういう仕事をしているんですか？」と聞かれて、地域再生とか、コミュニティ再生と答えて

います。だけど、自分の中でも半信半疑で答えている。

空き家、古民家などを再生しますが、そこに食文化、暮らしの生活文化があったのです。伝統工芸、お祭り、料理とか習わしなどもあると思います。そういうものをセットで再生していくことをやっています。一言で言うと、「暮らしの再生」というふうに考えていますが、暮らしが再生するとどうなるかというと、人が行き交います。

「篠山は阪神間から車で1時間強ですし、便利なところだから、空き家を活用しても上手くいくでしょう。しゃれたカフェをつくと阪神間から来てくれますからね」とよく言われますが、その時には、「いやいや、そんなことないですよ。徳島の神山、見てご覧なさいよ。どこが便利ですか？」と言います。篠山は都会に近いので、遊びに来てくれますが、日帰りが普通です。それをなんとか1泊してくれないかと思っているんです。だけど、神山は、そうじゃないから、いきなり「ここで暮らしませんか？」って言っちゃうわけでしょ？ 我々のところは、日帰り、1泊2日から始まって、短期ステイ、2地域居住、移住みたいなパターンにだいたいなります。神山は、きっと移住とか半年、1年のステイから入っていますね。でも今、現地に行かしてもらおうと、やっぱり宿泊施設、欲しいなとか言う話になって、たまに1日居て1泊して見て回りたいという人も、出てきているわけですよ。だから入口はちょっと違うし、主なターゲットは違うと思うけど、人が行き交うということというのは、一緒だと思うんです。

■古民家で地域の食文化を伝える

例えば、限界集落があります。半分以上が空き家のような集落です。そんな集落の建物を改修して、地域の食文化をもう一度取り戻して、その暮らしを表現します。

地域の野菜やお肉を使ったお料理です。ただしフレンチだったりすると、ちゃんとフランスから食材がきてフォアグラ、キャビアが混じったりしますが、基本的には地域の食文化を再生します。

あるいは、お母さんが自分達でしめ縄を作ります。そこで、「それをそのまま、ワークショップにして下さい」とお母さん方をお願いをして、ちょっとカッコイイチラシを作って撒くと、たくさん人が来ます。古民家・地域の食文化・伝統文化の3点セットでやって、人が行き交う状況を作るということです。

茅葺民家の再生にも取り組んでいます（写真）。屋根の茅が細って、穴があいて崩れそうになっていたんで見るに見かねて直しました。事業資金を回収しなければいけないので、セミナーハウス、合宿所をしています。学生や企業が合宿で来てくれます。ご近所に蕎麦屋さんがあって、そこのおじさんに蕎麦打ち体験をしてもらったり、先ほど言ったような素晴らしい里山の農園がありますので、そこで農業体験ができます。例えば山椒の実を摘もうかとか、黒豆の畝立てしようかとか。

地域の庄屋さんだった空き家では、その蔵に眠っていた食器を使って、地域の食材で和の創作料理を作るシェフがお料理を出すなど、いろんなイベントをしてその地域の文化を学ぶこともできます。

■古民家再生

古民家を流動化させる

こういう古民家再生をしつこく、しつこくやって、4年間で50棟くらい改修しました。店舗数でいうと26軒です。古民家再生の過程で、我々なりのノウハウが蓄積されていきました。そろそろ皆さんに提供する時期だと思って、古民家改修事業スキームをオープンにしています。

古民家再生にはいくつかのハードルがあります。1つ目はコストの問題。古民家を改修して住んだりするのは贅沢で、すごく改修コストが高いと言われているのは嘘です。いろんなやり方で、コストを下げることができます。我々で、だいたい坪単価30万円くらいで、先ほどの宿泊施設のように直せます。それをペイラインに乗せるためにボランティアに手伝ってもらって、さらにコストを下げる(図)。または、公共性を付与して補助金をいただくことはしますが、いずれにしても、もともとの改修費用が

安いということをご承知ください。

2つ目は、田舎では、空き家が流動化しない。売ってくれたり、貸したりしてくれない。地域の合意を得ることはなかなか難しいです。変な人に貸すとコミュニティに迷惑がかかるなど、都会の人が思わないようなことを田舎の人は思うんです。また、売ったり貸したりすると、「あの家、お金に困っているんじゃないか」と噂されるかもしれないと気にします。そういう世間体をとってあげるのが大事です。従って、誰がどのような目的で使うかということが地域で理解されればいいのです。説明会や住人ワークショップをして、地域の合意を取り付けるとその瞬間に、空き家の流動化が始まる。これも我々やっていて知ったことです。

神山と同様に、我々も空き家を所有者から借りて改修し、事業者に貸すというサブリースをします。その家賃収入で、我々は10年間で投資した資金を取り返すというサブリース手法です(図)。この手法は多くのところでやっています。ポイントは、宅建業免許がいらないんです。我々が不動産仲介すると宅建業になり違反になりますけれど、我々は直接取引している当事者ですので、宅建業免許がなくても契約できます。地域で不足するリソースを補填するという中間支援体制を構築するのが、我々のやり方です。我々は古い建物を使いますが、自分では利用せず、誰かが我々の古い建物を利用するという状況を作り出すのです。例えば集落を再生して宿をしたい。でも、地域の人達だけでは、リソースとかプレイヤーが揃わない。地域のどこに1級建築士がいますか？ 普通いません。じゃあ、我々が担いませよ



う。改修資金が無ければ、我々が資金調達しましょう。補助金や銀行融資申請などのお手伝いを我々がして、地域コミュニティに底入れをすることで、地域の夢を実現させることがひとつの中間支援の考え方だと思っています。

■地域コミュニティ再生

ノートでは、いろんなコミュニティにくっ付いて、いろんな人をマッチングしたり、地域の人達がコミュニティビジネス、ソーシャルビジネスで事業を起こせるような状況を作るということをやっています。ポイントは、小さくやるのが大事です。集落単位が1番いいです。地域で合意して、地域でまちづくりをする。地区で地域の皆さんを巻き込みながらやるというのが非常に重要で、やってみて分かるのは、思いがけなくいろんな付帯効果があります。先ほどの宿泊施設を始めた集落丸山はもう4年経ちますが、今ではほとんど耕作放棄地がないんですよ。人が行き交うから、有機農家の若い子が「やらせてくれ」と言ってきたり、都会の人が1畝ずつ黒豆畑のオーナーになったりします。募集をしたわけではないですが、勝手にそうなっていくのです。企業や市民の里山ボランティアの団体が、この集落に入ってきていただいて、里山再生を始められたりするんです。

里山再生とか、耕作放棄地解消を、行政が考えて施策して大きな網を打っても、ほとんど効果が出ません。だけど、ある小さなエリアでクリエイティブにやると、勝手におまけのようにできてしまう。こういう小さなコアを作って、その頑張っているコアをネットワークすることと、創造都市ネットワーク

の概念とは一緒だと思います。

■事業協同組合Opera

小規模自治体の再生と文化クラーターの形成



- 伝統的建築物のクラーターによって、小さな市町村がそれぞれの土地に根ざした文化を表現
- 小さな市町村のクラーターが広域文化圏を形成
- 広域文化圏のクラーターが多様な国土を形成

21

小さなコミュニティのコアをネットワークしていくと、1つの市町村域になります。その市町村がまた、ネットワークしていくという入れ子構造になったネットワーク構造を今考えています。各地域のクリエイティブコアが集まり、全国のコアをネットワークする事業協同組合をつくって、地域の空き家・古民家の活用、地域の食文化、生活文化を再生する1つの大きな事業体、運動体を作りたいと思っています。

篠山で構想している事業協同組合Operaの「Opera」は、佐々木先生の本（岩波現代文庫「創造都市への挑戦」2012）から引いたものです。もともとオペラの意味は職人の技術と魂を込めた「仕事」だということです。職人達が元気を出せるような新しい運動体を作り、そこで創造人材、つまり職人の育成というようなことを考えています。

集落丸山



ささらい



天空農園





木曾町 田中勝己氏
木曾町長／木曾広域連合長／木曾学研究所顧問

■木曾町まちづくり条例

国の財政圧力を背景にして全国で合併がどんどん進んで、約3200あった全国の自治体が1700と半分になってしまいました。長野県は、北海道とともに合併が進まなかった県の1つです。全国的には、平成の大合併というのは、ほとんど気に入られていないというのが、私は実態ではないかと思えます。木曾町では基本的には、合併して損したとか、やらない方が良かったというような話は、今は本当はないのではないかと私は思っております。

木曾町では、合併して損をしたと後悔しないようなまちづくりをやるうということ、まちづくり条例をつくりました。

全国の自治体では、まちづくり基本条例をつくっているところがたくさんありますが、自治法とかあるいは合併特例法という国の法律に基づかない、まったく自主的、独自の組織によって、独自の条例を作りました。

まちづくり条例で一番特徴的なものは、先ほども申したように、独自の条例として、自主的な地域自治組織をつくったということです。

全国には地域自治組織が600ほどあると言われてますが、議長の諮問機関として作られているのがほとんどです。

木曾町では、地域自治組織が諮問もできるし、提案もできるし、町長のリコール運動だってできる、行政への反対運動もできる。同時に、条例の中で自治組織の代表の集まりを諮問会議と位置付け、この諮問会議の了解を得ないと、町長は議案提案できないという仕組みを作りました。ですから、自主組織が提案権とともに拒否権、町の行政に対する拒否権を実施する仕組みを作ったところは、全国でも、この町だけだろうというふうに思います。

■徹底的な情報公開

木曾町ではもう1つ、徹底的な情報公開を掲げました。

情報公開を掲げている市町村は非常に多いですが、だいたい計画が全部できてから、情報公開するんです。そうすると、事実上は情報公開にならないのです。住民参加で町を作っていくという仕組みにはならないと思います。賛成か反対か、どちらかになっていくだけで住民参加の行政にはならない。

私達は計画段階、構想段階から公開することにして、町民を行政に参加させる仕組みをつくりました。

昨年、篠山市に行った際に市長から、「私の知り限り合併をリードした首長で、2期目もやっている町長ってというのは、聞いたことがない。木曾町で、あなたは2期目の町長をやっている。何で、2期目も当選するんだ」と尋ねられました。私は、この「まちづくり条例」と、まちづくりの町精神・理念という話を短い時間でしたが申し上げました。

■生活交通システム

評価を受けているもう1つの施策として、生活交通システムがあります。

例えば、開田高原からバスに乗って木曾町に来ると、片道1560円もかかりました。病院もスーパーも木曾福島にしかありませんし、電車に乗るにも、木曾福島駅まで出ないと乗れない。開田から出てくるには、自家用車以外は、バスしか交通手段がなく、合併のときに、「同じ町になるんだから、是非、交通問題を解決していただきたい。」という意見が非常に強力に出されました。合併協議会の中に木曾町の交通システムを考える委員会を立ち上げて、4年間かかって交通システムを研究し、200円で町内どこへでも行けるというシステムを作りました。幹線バスは開田行きバス、三岳行きバス、日義行きバスがあります。こういう幹線バスを走らせて、幹線バスの周りに循環バスを走らせて、それでもカバーできないところは、デマンドタクシーを組み合わせ

て大変なお金がかかっておりますが、そういうシステムをつくりました。

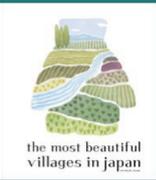
これは本当に喜ばれて、開田地区の住民から「町長、このシステムは5年だけは維持してもらいたい」、「お金がかかるので永遠に続くとは思えないが、5年だけは維持してもらいたい。」と言われましたが、もう8年経ちましたから、上手く維持されております。

「木曾学研究所」については、先ほど触れましたのでここでは省きたいと思えます。

木曾町のまちづくりは、創造的なまちづくりをしようと、挨拶のときにも申し上げましたが、いろいろなことを、そういう立場、そういう考え方で、まちづくりを進めてきました。「木曾学研究所」もそうした運動と人づくりというか、私達が勉強する場として、作ったものでありますが、それに基づいてまちづくりをしてきたということです。

■ 日本で最も美しい村連合

4 景観と文化を活かしたまちづくり
NPO「日本で最も美しい村」連合に加盟
H18年10月・開田高原が地域加盟、H23年10月・全町加盟



(自治体・地域)
(長野県)大鹿村、中川村、南木曾町、池田町、小川村、高山村
北海道美瑛町、岐阜県白川村、京都府伊根町
徳島県上勝町、高知県馬路村、島根県海士町
等49団体

(企業サポーター)
カルビー(株) 伊那食品工業(株) (有)エイチ アイ エフ(株)博報堂 信濃毎日新聞社等

連合の理念と活動
平成17年10月、失ったら二度と取り戻せない日本の農山村の景観や文化を守るため、フランスの活動を模範にNPO法人を設立。呼びかけ人の北海道美瑛町をはじめ、平成24年10月現在49の町村・地域が加盟。企業サポーターも多数。海外ではフランス・イタリア・ベルギー・カナダ(ケベック州)などで組織。

「日本で最も美しい村」連合に、2006年に加盟しました。最初は開田地域だけ入りましたが、木曾町に調査に来た審査員の委員長の熊本大学の先生が、木曾町全体を見て「開田高原だけでなく全部入るべきだ」と言われて、2011年には全町が参加することになりました。

「日本で最も美しい村」連合は、小さい村や農村がどんどん衰退していく中で、農村景観や農村文化を守っていけば、観光客がそういうところを訪れるので「町を元気にしていこう」という趣旨で始まっ

た運動であります。フランス、イタリア、カナダでは大きな運動となっております。イタリアでは400ぐらい自治体が参加した大運動となっております。最近では、イタリアをレポートした本も出版されました。その本では、イタリアも同じような山村地帯、農村地帯が過疎になっていたのが、過疎が止まって、農村がだんだんまた活気を取り戻したと報告されております。

■ 「すんき」を核とした産業振興

食文化を伝える

「伝統+科学で再生を！」と掲げて、地域資源研究所を3年前につくりました。自治体の多くは工場誘致だけに力を入れているのがほとんどです。もちろん工場が来てくれるのは有難いですが、それよりもやっぱり、伝統的な産業、地域にあった産業を育てていくことも、大事ではないかと思えます。町の資源を発掘し、これを活かして地域を活性化していこうということで信州大学を退官した先生を迎えて設立しました。乳酸菌漬物「すんき」は、木曾町や、その周辺で作られています。いつ生まれたかは、はっきり分かりませんが、松尾芭蕉の句に出てくるので、江戸時代には間違いなくあった伝統食品です。ずっとひっそりこの地域で伝えられてきた食品で、乳酸菌という菌の発酵の力で漬けているという世界でも類を見ない塩で漬けない食品です。世界に例のない漬け物ということで、東京でシンポジウムを、去年までで3回やりました。そして、近年は全国放送でもどんどん取り上げられるようになりまして、「す

5 伝統+『科学』で産業おこし
地域資源研究所の設立

木曾谷は資源の宝庫、菌が新しい産業を創り出す
乳酸菌漬物「すんき」を核とした産業振興



すんき → すんき乳酸菌を使った町内企業の商品



(左) 研究所の内部・(中央) 保井久子所長の指導を仰ぐスタッフ・(右) 抗ウイルス機能を持つほおろ

んき」ブームみたいなものが今、起きています。この乳酸菌を新しい産業に活かそうと、ヨーグルトやアイスクリームなどいろいろ作っている会社から、「植物性乳酸菌でヨーグルトができないか？」と相談を受け、私も自分で実験したりして、作れることが分かったので、県の研究所に依頼して、菌を探してもらいました。今は商品化されて、結構売れています。

そして今やっているのは、町の天然酵母採集です。2011年に町の資源を探そうということで、5000種の天然酵母を集めました。乳酸菌は約200種集めました。それ全部を保存してあり、そのうち7種類の特許申請を出しております。このほか、枯草菌の研究もしています。

さらに、木曾に来られたら、木曾の食べ物食べていただくことが、観光客の皆さんへの最高のおもてなしになると考え、「スローフード木曾」を立ち上げてスローフード運動を起こしました。今では全国での運動となっています。

■木工芸振興

大工と職人の技を継承する

私が木曾福島町長の時代に在来工法住宅の推進を始めました。大工さんが、どんどん減っていき、そして大手住宅メーカーの家が建ち並ぶという状況が少しずつ増えていき、日本の農村景観が失われてしまい、九州に行っても、北海道に行っても、木曾にしても同じ風景だと、悲しく思っていました。また、大工技術を大事にしなくてはいけないと考えて、「木

造住宅推進協議会」という組織を1999年につくり、在来工法技術の住宅をつくることに努力してきました。

またこの町は、春慶塗の里でもありました。八沢春慶とも木曾春慶とも言いますが、戦後に崩壊したのです。これを保存しようとするんな努力をしています（写真）。

■木曾音楽祭

39回目を迎えた木曾音楽祭

「小さな町の素敵な音楽祭 木曾音楽祭」は2013年で39回を数えました。この回を積み上げてきた背景には、木曾音楽祭を支えているボランティアがあるからだと言えます。

演奏家の皆さんの食事をすべて町民の皆さんがボランティアで作っておられます。宿泊も、ほとんど別荘や民家に分宿しております。

演奏家に払うギャラも、私が町長になってから1度も上げたことがなく、16年間凍結して本当に安いギャラで、ボランティアで演奏家に来ていただいております。日本を代表するような著名な演奏家がたくさん来ますし、それから最近頭角を現した若い演奏家も中にはいます。こんな片田舎で、もの凄い演奏会が良く続いていると、よそから来られた方がビックリされるような音楽祭になっています。

■木曾町サポーターズ倶楽部

2011年に「木曾町サポーターズ倶楽部」という組織を立ち上げました。木曾町が面白い町だと、いろんな人が訪ねて来ます。訪ねて来た人が、また友達を誘ってくるという形で、多才な皆さんが来られていますが、彼らが町を応援するような運動をします。例えば、メディア関係者と協力して「木曾メディア塾」というのを町で始めました。将来メディアの世界に進みたいという大学生を、木曾で呼んで合宿をします。そして、第一線のメディアの皆さんが、指導するのです。こうした多才な活動が広がっているのです。

6 木は木曾の代名詞、木工芸振興

伝統工芸(八沢春慶塗)の保存



(左)漆の館で春慶塗を研究する手塚隆氏



(右)中学生の漆塗り体験



新しい木工芸 クラフトマン支援
東京でのクラフトフェア



伝統工芸からライフスタイルをデザインする
木曾生活研究所の設立(H24)

(2) パネルディスカッション

佐々木氏：事例報告では非常に多彩な話が出ましたが、創造農村という切り口が、いろんなアプローチがあると分かったと思います。そこでまず、会場から質問を受けたいと思います。

■伝統工芸とアート

女性A：東京でデザイン事務所をしており、経産省で伝統的工芸品産地プロデューサーをしています。「日本の宝というのは、何か？」というと、やはり「技」にあるのではないかと思います。技というのは日本の地域の地域性、伝統の中で、育まれて残ってきたものです。世界的な評価を受けてきているもの、ただこれをもう少し力を入れてやっていくこと、これもアートのひとつではないかと、私は考えていますが、先生方のご意見を聞かせてください。

佐々木氏：地域には伝統工芸のある昔の暮らしを支えてきた技があり、現代アートのアーティストを地域がどれだけ活用するかという話がありました。このアートと伝統工芸の「技」は、どういう関係にあるかという質問ですが、学者風に応えますと、ラテン語にアルテという言葉があって、アルティスとも言います。これは「技」であり「美」なんです。そこからアートが発生します、語源は同じものなんです。だから非常に親近感がある。

ただ、日本語の「技」と書くのと、アートと書くのとは距離があるように見えるけど、同じだと考えていいと思います。そういったところから、現代アートに入っていくと「中之条ビエンナーレ」が、地域の技にどれだけ影響を与えたかをまず伺いたいと思います。

入内島氏：すごく難しい問題だと思います。中之条の「こんこん草履」は、熟練のお婆ちゃんが、1日かけて2足やっとできるとののですが、それで1,200円です。これでは生計を立てていくのは無理です。どんどん後継者が居なくなってしまうのです。何かデザインの力をプラスアルファして、残っていくようにできないかと思って、エルメスの副社長、

地元の工芸作家に相談しているんですが、簡単には答えが出てこないというのが現状です。「こんこん草履」は工芸品ではなく民芸品ですが、どうしたら時代にあったものとして残していけるようになるのか、やっぱりデザインの力、アートの力ではないかと私は思っています。しかし、上手くできていないのが、現状です。

佐々木氏：同じことを、金野さんに聞きましょうか？

金野氏：篠山では、伝統工芸で丹波立杭焼があります。今そういうものが脈々とあって残って来たとおっしゃったんだけど、ほとんど残っていないと思うんですね。だから何とか残さなければいけない。結局は「人」なので、佐々木先生が言ったように、やっぱり職人を育てないといけないわけです。新しく作ることは、僕らはあまりやりません。これまでのものを、次の世代にどう繋げるかということを中心にやっています。新しい現代版徒弟制度のようなものをつかって、ちゃんと基準をつくり、現代にあてはめるということ、当たり前のことだけれども、そういうシステムをつくらないと駄目じゃないかと思って、今、篠山でやろうとしています。

佐々木氏：大南さん、どうぞ。

大南氏：もともと僕らも職人を意識していました。商店街を再生する上で、若い職人達に商店街の長屋などいろんな所に入ってもらおうと考えて、空き家改修を始めたなら、職人じゃなくて、その動きを見ていたサテライトオフィスのベンチャー企業が入り始めたということです。手探り状況の中で、予期せぬ現象が起こったから、それじゃあ、サテライトオフィスに来てもらえば、商店街再生という目的に近づいていけそうだと考えて、そっちの方向に走っていったのです。たまたまです。結果として、サテライトオフィス街のようなものができつつあるところです。だからまだ、職人さんには非常に未練が残っております。

佐々木氏：田中町長、いかがですか？

田中氏：技とアーティストが同じだと考えたことはありませんでしたが、伝統技術を守るのは本当に大切だと思っています。木曾町では、春慶塗、漆器、住宅建設です。日本の住宅、日本の大工さんが、今、もの凄い勢いで減っています。大工さんが高齢化し年寄りが亡くなっていき、若者の中で大工を目指す人がほとんどなくなっています。宮大工は特殊な人ですが、住宅建設の普通の大工さんともなくなってしまう。日本では、恐らくあと50年もしたらまったく変わってしまい、古い家をもう修理修繕する人がいなくなるのではないかと、危機感を持ちます。私はこの間、金沢に行って、職人大学を見せてもらいましたが、ああした運動を起こしていかないと、日本の文化が衰退すると思っています。

佐々木：金沢の話も出ましたが、私が金沢大学にいた当時、山出前市長といろんな議論をしてきました。金沢市が、「市民芸術村」を旧繊維工場の倉庫の中に作ります。そこでは、演劇、音楽、絵画、現代アートなんかも扱う。その中に職人大学校があり、行き来ができるのです。先程、人の往来があると言いましたが、「市民芸術村」の中で、伝統工芸の職人さん達もいれば、コンテンポラリーアートをやっている若い人達もいて、彼らが自然と交わるような場所を作っていくことがポイントです。その中で自然の動きが発生してくるというようなシステムを皆さん言っておられるんですね。そのシステムをどうやって準備していくかというところが、従来は欠けていたのです。

ただ単にハードな建物を作って、作りっぱなし。その中を活用したり、あるいは古いものでも、古民家でも、それを上手く活用していくと、そこに隠されていた、あるいは眠っていた価値が再発見される。そのことによって古い技と新しいアイデアが結びつくきっかけが生まれるのです。

創造都市とか、創造農村というのは、そういう古いもの新しいもの、異質なものが出会う場所を上手につくっていくことだと思います。

伝統と創造

男性A：岐阜県立森林文化アカデミーという専修学校で教員をしています。

特に創造農村の農山村のことについてお聞きしたいと思います。空間文化や景観という話があります。地形、自然の繊維、あるいは農林業などは、人の手が加わってできてきたもので、決して名のあるアーティスト、デザイナーさんがした仕事ではない。「用の美」という言い方もありますが、培われてきたものと、今回お話のようなアーティスト、商業デザイナーのような方による、古民家や商店街を再生した空間は、私の目から見ると、心地の良い美しい景観に見えますが、この2つは果たして一致するものでしょうか？

あるいは、そういった新しい動きが「用の美」というものを、復活させるような起爆剤になるのかどうか、私自身は感じつつも、確信が持てないです。皆さんにそのあたりのことを、お伺いしたいと思います。

金野：篠山では、今、おっしゃたような、暮らしというようなテーマでやっているの、暮らししている人が作っているものに重心を置きます。だからおっしゃっていることは非常によくわかって、私もいろんなことを考えています。

農村空間とか美しさというものは、本当にそれだけでアートなのです。彼らは、名はないけれども素晴らしい能力、技術をきつと持っているわけです。そういうものを伝えているという考え方であって、その中から少し尖がったものが出てくるとか、何かインパクトがあってもいいかと思っています。

田中氏：非常に難しい話なんです、木曾町は伝統的な文化や技術、いいものを残して、新しい時代に再生し、活かしていくという考え方でできました。まったく新しいものを、アートとして入れるということはやっていませんが、町にはたくさんの移住者がいます。こういう人達の中には、創造力を、持っている人達がたくさんいます。すべての時代は進化していくわけですから、そうして新しい文化が育っていくのではないのでしょうか？そうやって時代や歴史は、作られていくのではないかと思います

大南氏：僕自身は、あんまり同じになってきたら、逆に面白くないと思っています。

伝統工芸から入ってくる人、現代アートから入ってくる人、演劇から入ってくる人、いろんな人がやるから面白いのであって、それを全部同じような形に、価値観1つに定めていく方が、逆に新しいことを生み出しにくい気がします。

■創造都市と創造農村

佐々木氏：「創造都市」というものを考えた時と、「創造農村」というものを考えたときに、例えば都市景観の美しさは多分に建築家やデザイナーといったアーティストの意図が非常にはっきりしています。ところが農村の自然景観は、自然の持っている美しさ、自然の持っている創造性、このウエイトが圧倒的に大きいです。

人間が行う技というのは、小さいものだと思います。そこで、田中町長が言ったように、美しい村を作ると決めたら、まずその景観を保全するところから入ると思うんです。自然景観の美しさを取り戻す。取り戻した先に何か少しでも新しいものを付け加えるかどうかというのが、美しい自然景観と向き合った時に、創造的な活動をする人達の配合の仕方ではないかと思っています。

例えば今、現代アートのトリエンナーレをやっています。瀬戸内海では「瀬戸内国際芸術祭」、大都市では「あいちトリエンナーレ」をやっています。この「瀬戸内芸術祭」と「あいちトリエンナーレ」を比較すると、僕はそのことを非常に実感します。

瀬戸内の場合は、ベネッセの会長が、小さい頃から自分が慣れ親しんでいた瀬戸内海の美しさが工業化の中で、どんどん汚されていくのを見て、それを何とか戻したいという、それが瀬戸内の復権なんですね、大きなテーマです。これにはまず瀬戸内がもってる美しさを、人々が生活レベルで再建することから始めないといけない。

例えば、豊島では、産業廃棄物の山ができた。そこをアートで再生しようとしたときに、「金沢21世紀美術館」の設計者である西沢立衛さんが、豊島

美術館をつくった。島々が見える丘の上に、自己主張するよりも、むしろその中に溶け込むような美術館、そこで自然と対話ができるような美術館を作った。

彼には、圧倒的な自然の持っている景観美というものが、まず出発点にあった。ところが「あいちトリエンナーレ」のテーマは「揺れる大地」です。その芸術監督に選ばれた五十嵐太郎さんは東北大学で震災を経験し、「揺れる大地」をテーマにした。そこで選んできたメインのアーティストはヤノベケンジさん。彼の作品は、愛知芸術センターの中に「サン・チャイルド」という大きい造形物があります。彼がかつてチェルノブイリを視察したときに、チェルノブイリの保育園で、子供達がいなくなって、誰もいない中で拾った人形からインスピレーションを得て、22世紀、23世紀の未来の核戦争の中でも生き延びれるような、姿の人形をモチーフにするんですけれど、これには巨大な自然科学が破壊的な力がやってきた時に、人間がどう立ち向かうかという強いメッセージを持っています。それが、愛知芸術センターのど真ん中に立っているんです。それは、これまでの文明がつくってきた大都市が持っている問題と向き合うアートの力です。

都市と農村の大きい違いは、自然の圧倒的な造形美の中でアーティストが非常に小さい存在として自覚できたアートと、人間の営為の積み重ねである大都市で出くわすアートとの違いです。そういったものを感じます。だから、創造農村といった場合、農村景観とか農村の美しさ、自然の美しさというのを第一に考える。ここを外してしまうと、創造農村の存在の意味がないと思っているくらいです。

男性B：福岡県京都郡みやこ町という非常に小さな町から参りました。「スローラボ」というNPOをやっております。クリエイターとは、アーティストとか、特殊な人と考えずに、創造的暮らし手だと自分達の活動の中で言っているんですけれども、誰もがクリエイターであるという考えのもと、いろんな活動をしています。私の住んでいる町も、やはり過疎高齢化が進んでいますが、地縁、血縁というも

ので成り立っているこの町を変えていくには、新しい価値観というか、違う縁というか、新しいレイヤー層をつくっていかなくてはいけないという思いで、私どものNPOに共鳴してくれる人達とつながりながら、活動をしているところです。パネラーの方々の実例を参考にさせていただきながら、良い所を普及させて、自分の地域が発展することができればと思っています。

先ほど、入内島さんが、すでに町に移住して来られた方が、離れていったことがあったと言われましたが、アートやまちづくりに取り組むために移住して来られた方が離れていく原因と、それに対して、どうすれば地域が持続的に発展することができるか伺いたいと思います。

入内島氏：中之条という小さい町の小さい事例でしかないですが、アーティストは、自分達を待っていてくれる地域に行きたいという気持ちがあると思います。「中之条町にアーティストが、移住し始めた」という記事が載り始めると、「私も移住したいですけど、どうすればいいですか？」という電話もありました。ただ本当に移住できるかというと、そうではない。例えば、山重さんという総合プロデューサーは、電通の仕事をしていますので、東京都と中之条を行ったり来たりしています。中之条に住むことも可能ですが、移住しないアーティストが、圧倒的に多いと思います。

アーティストで食べていききたいけれども、30歳くらいまで頑張っ、やっぱり食べていけなくて、普通の人になるという人が、日本ではすごく多いと思います。そういう彼らにチャンスを与える町があれば、行ってみたいと思うんですね。私はそういう方針でやっていて、アーティスト50人移住してもらうのを目標にしよう言っていたので、彼らとも話をしたり、直接接するようにしていました。そうすると、移住者がだんだん増えて、10人くらいまでいったんです。役場の嘱託職員になってもらったりしていました。

でも、私が辞めて、選挙もなく無投票で新しい人が町長になっているんですが、前任者の方針は、な

かなか受け継ぎづらいところがあります。しかも、こういうアーティストみたいな分かりづらいことは、議会も「文化で町が良くなるのか」と平気で言います。「経済は文化のしもべ」と福武総一郎さんは言っています。そこを分かってないと、アーティストはすーっと居なくなってしまいますよね。それを分かって、彼らをちゃんと受け入れられるかどうかは地域の力だと思います。

「若者、馬鹿者、よそ者」を、私はすごく良い意味で言っているんですけども、その3つを揃え持つ人はいないです。アーティストは3つとも持っていますから、そういう人達をいかに町に引き込んできて、本当に大事だと思うんです。その辺が分かってないのが一番残念なところです。

大南氏：神山の場合は、基本的に、去る者は追わずというか、離れていくというのは、ある面、人の気持ちの移動の問題なので、防ぎようがないと思っています。結局、神山に入ってきた人達が、自分達の夢とか思いを実現する際に、受け入れ側としてどれだけお手伝いできるかが、1つのポイントになるかと思っています。よそでは断られたけれども、神山だったらやらせてもらえるらしいといった感じで若者が入ってくるわけです。現このように断らないことを、1つの価値として続けていたら、結果的にいろんな人達が入って来て、彼らのネットワークに繋がっていったのかなと思います。

でも、実際に事業をやるのは彼ら自身で、地域の人間はサポート役になります。彼らが上手くやり遂げたら、そこから新しい人間関係ができて、また違う人とつながって新しいことを生み出していくといった連鎖反応を起こしていく気がします。

田中氏：今「手仕事市」を、町のあちこちでやっていますが、木曾町には38人の木工作家が来ています。木曾では技術専門学校が隣町にあります。そこで学んだ人達の中には、一流企業で頑張っていたのに、突然、考え方を変え、生き方を変えて、専門学校にやって来て、木工技術を学んで、木工作家になった人もいます。「ちっとも売れないもんだから、生活に苦労しているんじゃないか？」という

人達を支援したいと思って、町の規則を作ったりもしましたが、なかなか難しいですね。町が買い取るということもできませんし、会社を作って、彼らの作品を集めて販売するのはどうかなど、私自身も非常に悩んでいます。

そういうことを大事にしていかないと、日本の未来は淋しいと思います。皆さんの中で知恵があったら、是非、知恵を貸していただきたいと思います。

佐々木：今の質問の中でいくつか関係するテーマがあったと思いますが、1つは、中之条のように、入内島さんが在任中に3回やられた「ビエンナーレ」。町長を引退された後でもどうやって続けるかという話でしたが、これが順調に展開していければ、アーティストも、まだまだ希望が持てますよね。

「ビエンナーレ」や「トリエンナーレ」を長くやっている世界の町がどれくらいあるか調べましたが、「ベネチア ビエンナーレ」は100年やっているんです。1世紀です。1世紀やる間に、相当、たくさんの市長が代わっているわけです。でも続けるようなシステムやノウハウがある。この回答の1つは、行政ができることと、NPOや市民セクターができることが、それぞれあって、うまく分担できていることだと思うんですね。

例えば、神山町は、行政は頭が固いかもしれないけれど、NPOのグリーンバレーは、凄く先進的です。行政の限界をカバーしているわけです。あるいはノオトのような一般社団法人と行政がWin-Winであればもっと効果が高いです。「創造都市」や、「創造農村」ということで、明確な意識を持ってやっておられる首長さんが、ずっと続けばハッピーだけど、そんなことは必ずしもあるわけではない。世の中紆余曲折があります。

金沢で十数年、「創造都市」を推進しているのは、その間、市長が代わられたりするけれど、「金沢経済同友会」という経済団体が「創造都市会議」を毎回開催しているからです。

町村の中で、どういうプランがあって、どういった推進母体を、それぞれの町村のケースに合わせて作り出していくかというのも大事なことはないかと

思っています。決して行政だけで持続可能になるものではないと思います。

男性C：信州大学の加藤と申します。2点伺いたいと思います。

1つは「創造農村」というコンセプトをどう考えているのかということ。もう1つは、今、アベノミクスと調子のいいことっていますが、まさに右肩上がりから、高齢化社会、減少社会という状況になって来ているという中で、この「創造農村」という概念を我々がどうクリエイティブするか、というのが今、我々に投げかけられている課題です。それは別の言葉でいうと、農山村の再生という概念だったりします。その時に、いつも気になるのは、「生業（なりわい）と営みの場である集落」。皆さんは、コミュニティと横文字を使いましたけれども、私は共同体という問題でいいじゃないかと、どこに違いがあるのだろうという気がします。

ところが、コミュニティ、共同体はよそ者が来るのを拒否する場合もある。そういう意味で共同体が持っている両義性、これをどういう風に皆さん考えるのか、このことを考えない限り、「創造農村」は実現しないのではないか、という感じがしています。

佐々木：今の質問ですが、本当は最後の答えとして、皆さんに一言ずつ答えていただこうと思っていたので、それまで皆さん、ちょっと考えていて下さい。皆さんの答えを、全部かき合わせていった時に、グローバル資本主義が荒れ狂う中で、いったい過疎の小さなコミュニティや共同体に、未来があるのかというような疑問に、1つの道筋が与えられるのかもしれないと思っています。答えは後の楽しみにしておきましょう。

男性D：長野県の本曾地方事務所の者です。移住や空き家について、それぞれ先生方のお話があったので、興味深くうかがいました。金野先生の資料の中で、「空き家が流動化しない理由」を書いてありますが、「仏壇が残っている」「盆や正月には子どもが帰ってくる」「変な人に貸すと近所に迷惑がかかる」というようなことがあがっていると、これは絶望的だと思ってしまいますが、貸せない理由を創意

工夫でクリアーしていくヒントをもう少しいただけますか。

あと、同じ資料の中で、最後時間で説明いただけなかったのですけれど、「伝統的建築物を活用する」制度枠組みが必要」というようなワードを、ちょっと教えてください。

金野氏：その建物がどう使われるかというのが地域で合意されると、流動が始まると申しました。例えば、「仏壇が残っている」から貸せないとありますが、我々の集落では、仏壇が残ったまま、宿泊施設として貸していました。普段は、お客さんが来て泊るんです。何故か開かない襖が1枚あるだけなんです。そこには仏壇が、ちゃんとあるんです。そこを持ち主の方は、年2日、お盆と正月に帰ってくるだけなので、この2日の優先宿泊権利を持ち主の方に与えます。そうすると、カビ臭い家ではなくて、草が生えている家じゃなくて、綺麗な宿泊施設に帰って来て、法要をしてそこに泊まって、なんならフレンチを食べて帰れるわけです。創意工夫とはそんなことです。

家が片付いてなかったら、行って片付けたらいいんです。「片付いてない」と持ち主の方に言われたら「僕ら片付けます」と言っておしまい、そんな感じですよ。

もう1点聞かれたことは重要なことなんです。日本の国は、古民家など伝統建築物を文化財として指定して保存するという制度があります。しかし、文化財指定された建物の約1,000倍くらいの、指定されていないけれど価値のある建築物があります。これを活用するという制度が、日本にはありません。おかしいでしょう？ ヨーロッパに行ったら、街角の古い建物にカフェがあったり、B&Bがあって、そこに泊まったりできます。しかし日本ではそういうのをつくってはいけない制度になっているんです。これは改めなくてはいけません。現在、「国家戦略特区」の取り組みを進めています。上手くいくと10月に、この制度が動きます。「建築基準法・旅館業法・消防法などの一体的な規制緩和」を、内閣府に持ちかけている段階です。

女性B：山梨で教員をしていましたが、今は長野県で農ある暮らしと仕事を求めて移住して、取り組み始めた者です。今日の話がうかがってとても勉強になった、確認できたなと思ったのは、その地域について考える時の順序です。往々にして1ターンを増やすとか、人口減少をくいとめるとか、少子化に対応するとか、耕作放棄地を解消するということを目標において、それに向かっていくと考えがちですけど、そうでなくて、あくまで結果だというようなコメントが複数の先生方がされたと思います。

それが、結果であったとして、例えば、景観保全だとすれば、何色にするかとか、どう揃えるかとか、草刈りを何回やるかとか、そういうことではなく、生業が成り立ったり、やりがいを持って農業に取り組めるという社会的な環境があって、初めて景観保全がなされると思っています。そうしますと、小さかろうが、限界集落と言われようが、その条件を活かして、一生懸命やっていくんだという人々の営みが、まずあって、それが結果として、政策的にみて成功と言われる時もあれば、政策的に日の目を見ないということもあると思うんです。しかし必要なのは、その手前のプロセスをつくることだというのが皆さんのお話で分かりました。

例えば大南さんは、「芸術家にとって場の価値を生むような地域をどう作っていくか」と言われましたし、金野さんは、「行き交うということを生む」とおっしゃいましたし、入内島さんは、「空間デザインの運営をアーティストに委ねながら、それを育てていく」とおっしゃいました。表現はそれぞれですが、プロセスをどう作っていくかってことを、教わった気がします。

しかし、そのプロセス自体は、やはり担い手、その地域に固有のものなので、容易には真似できないように思うんです。そこを承知で伺いますが、そういうプロセスはどうやったら生まれるのでしょうか？

大南氏：結果的に面白いものが生まれるスタートは、本人自体が「こんなことをやったら楽しい」ということから始まるような気がします。例えば、グー

グルをつくった人も「なにか面白いから、やろう」からスタートして、それをずっと掘り進んでいくうちに、結果として社会の課題が解決していく。神山ではよく、「大南さん、もうアーティスト・イン・レジデンスの使命は終わりましたね」「これだけサテライトが入って来て、移住者が入って来ているから、もう、やらなくてもいいじゃないですか？」と言われます。でももともとアーティスト・イン・レジデンスに使命を与えていたわけではないんです。地域の住民達が、アーティストであれば、自分達の方で町に呼んで来られる。お接待の文化が根付いているから、そのお世話はできる。そして、自分達もその制作に加わるような形になればもっともっと「面白くなるよね」というところからスタートするわけです。それからいろんなことが発生していきます。

物事ってというのはやっぱり、やってみないと分からない。サテライトオフィスに来る人は循環してくる人だから、雇用を生まないと言われたが、2年間で20以上の雇用を生み。移住には結びつかないと言われたが、4、5世帯が移住し、神山で働くことになった。とにかく最初は、面白いとか、こうやったら楽しいよねっていうことから入って行って、内にいる人達が楽しそうにしていたら、その場は外から見ても楽しいわけです。

みんなが頭を突き合わせて、下向いて「限界集落って辛い」と言うようなところには、入っていきたくて思わないじゃないですか？ 人間、やっぱり辛い状況にありながらも、前向きに真剣にやっていくことで、「おれも一緒に参加してやろう」という人を引っ張ってくるのであって、自分達が直向きに、少しは良くなっているはずだと信じながら一步一步前に進むことだと思います。

■伝統芸能

男性E 木曾町出身で、サポーターズ倶楽部の会員でもあり、今日は京都から来ました。和太鼓の底辺を広げる仕事をして、人々がハッピーになるために、人間的なコミュニケーションを豊かにすることを仕事としてやっております。

先ほどの話、本当に勉強になって、とても素晴らしいなと思いますが、全体としてはアートといいながら、芸能というものまでは意識があまりされてないかなと。

例えば、第2次世界大戦後に日本中に芝居小屋は、1,000以上あったのが、今はもう100もあるかないかと言われています。各農村地帯には地歌舞伎、あるいはさまざまな神楽、芸能があって、祭りを中心として、人々のコミュニティがすごく発達し、その中に豊かな人間関係がある。

地域の中で、住民が主役となって表現することが祭りという形に象徴的に表れていると思うんですが、そのようなことをもっと意識して、「創造農村」とか、あるいは、「創造都市」ということに、私は力を入れていきたいと思っています。

入内島氏：中之条町は人口1万8,000人しかないですけども、獅子舞と神楽が24あります。子供も少なくなっているんですが、24の集落で残っているんです。たぶん、この人口規模で、こんなに残っているところは、日本でもないんじゃないかなと、群馬県だけは調べてみたところ、人口対比でみると断トツで多いです。

そのことに最初に気付かせてくれたのは、アーティストでした。アーティストが入って来て、町のパンフレットをつくるときに、神楽などの伝統芸能を前面にもってくるわけなんですね。住んでいる人達は、あまり気付かなくて、当たり前だと思ってやっているんですが、遠くから見ると、これがいかに素晴らしいことかを、改めて教えてもらった。私も、そのことに気づいて数を数えて、あまりに多いのにビックリして、これらを残していこうと再認識するようになりました。

佐々木：私が印象に残っているのは、東日本大震災で被災された方々が、再び勇気や希望を持って暮らし続けられるかどうかっていう時に、伝統芸能の力が根源的だということがあちこちで報告されています。私も、神楽の復興のお手伝いをさせてもらったことがあるのですが、実は東北地方に、あれだけたくさんの伝統芸能があるというのは、歴史的に非

常に大きな被害が繰り返されて来たからではないか
と思います。亡くなった方を弔ったり、自然の猛威
を受け止めながら、特に生き残った人達が本当に、
勇気を持って生きられるかっていったときに、伝統
芸能は、まさに人々の心を奮わす力があるんだろ
うと思うんです。それをアーティストが再発見する
ということなんだと。

男性F：信州大学の医学部を出たあと、東京で医
者をやっています。お伺いしたいのは、村という
思い浮かぶのが、村八分とか。いい言葉ではない
ですが、特に何が気になるかという、皆様がやっ
ている「創造農村」で、医療とか教育のインフラを、
今後どうやって考えていくのかということです。

「村の子ども達は、結局、都会の高校に行かない
といけない」とか、「年を取ってくると、うちの
お婆ちゃんは息子が都会にいるから、都会の方に引
越すことになった」という話をよく聞きます。創造
的なエネルギーを持って、教育、医療などの問題を
どのように解決していくのかということ、ぜひお
聞かせ願いたい。木曽町では既に先進的にやられ
ているようなのでお伺いしたい。

田中氏：木曽町もどんどん過疎が進んでおりまし
て、合併してから、人口が11%減少しました。若
者が都会に出て行って帰って来ないということが大
きな原因です。私は、「ここで食っていけない」こ
と、一番大きな原因になって、都会に出て、都会
で暮らし、村の年寄りが一人で暮らせなくなると、
都会へ呼ぶという形で人口が減っていくと考える
きました。しかし、日本の農村が、どんどん崩壊
していくことになれば、日本の国家そのものが、
持たないのではないかと思います。

2011年2月、国土交通省の長期展望委員会が、
「2050年の日本」の中間報告を発表しました。
それを見ると40年後に、山村は61パーセント
人口が減り、山村の2割は、無居住化すると書
いてある。無居住地域には色が塗ってあり、都
市部を除いて日本中が真っ赤です。北海道、四
国、東北地方も真っ赤ですし、木曽も真っ赤
です。山村人口が今の4割になるといいます
から、もう大変です。

私は、そういう日本であっては日本の未来が
ない、何とかしてここで暮らしていける社会を
作っていかないといけないと思って、新しい
日本の未来、日本の国づくりのために、「創造
農村」の地域づくりに取り組むことは、戦
いだと思っています。

頑張っていくうちに国民の意識もだんだん
変わり、価値観が変わっていく。価値観が
変わらないと農村は生きていけないです
よ。儲けた金で、楽しく贅沢して暮らす
ことが幸せだと考えているうちは、
日本の社会は変わらないと思います。
価値観が変わり幸せとは何か、人間が
支え合って生きていく社会でない
と農山村は守れないとか、こうい
うことに気付かないと、きっと木
曾も守ることができないのではない
かと思っています。

佐々木氏：医療の問題で言いますと、信州では
佐久総合病院が世界的にも農村医療の
トップクラスです。そこでは今、地
域交流が病院をコミュニティの中
心にして展開されている。病気に
なってから患者として訪れる前
に、日常的に生活レベルで予防医
学に努めている。そういった実践
が各地で始まっている。病院が
持つコミュニティ再生機能に着目
したいところです。

男性G：私は地元の高等学校を経て、最後は定
時制で教師をしておりました。さ
っき田中町長さんが、八澤春慶
の話をしていましたが、八澤春
慶の塗職人は、いくらでもいま
す。一番問題なのは、木地をつ
くる後継者がいないことな
のです。今、木地をつくる職
人は90代。私が担任をしまし
た45歳の木地職人は、ここ
では生活できなくて、よそで
生活しています。15年後には、
彼がただ1人の木地職人にな
るでしょう。木地職人はもう
絶滅状態です。私は、日本木
地師学会を1983年に設立した
1人で、約30年間にわたり、
雑誌を延べ約4,000ページ
編集してきました。編集しな
がら、後継者をどうつくる
のか、木地師、木工挽物の職
人をどうつくるのかが、研
究者である私の宿命だった
わけです。具体的取った対策
として、岐阜県、鳥取県、
岡山県で木地師を「人間
国宝」にさせていただきました。
それは個人の名誉というより
も、後継者の問題です。

私どもは、江戸時代以降を中心に木地師研究をしています。彼らは山から山を転々と歩いて移動した人達です。さっき福岡県の方が、みやこ町と申しましたが、ここもやはり木地師の集落があります。四国の半田町、群馬県の上野村にも、木地師の集落があります。彼らは転々としながら、その地域の産業を打ち立てていく。会津漆器、輪島漆器も、すべて木地師が基をつくったのです。

佐々木：私も金沢の伝統工芸を調べている時に同じような思いを持ちました。そこのところが欠けたら、蒔絵づくりとか、加飾だけではできないですね。そういうベースのところをつくる人達に光を当てる、これは「創造都市」「創造農村」の中でも大事なテーマだと意識していますので、ぜひ一緒にやっていきたいと思います。

では最後に、4人の方に「創造農村」を一言で言ってもらって、まとめてたいと思います。それでは入内島さんから。

■創造農村とは

入内島氏：一言では難しいですが、根底ではどう生きるかという価値観が変わっていかないといけないと思います。グローバル化がすべてという価値観の中では、農村は魅力がないかもしれないけれど、その価値観をちょっと変えた時に、農村の持続可能性ではなく、持続価値というものがみえてくると思います。それを生み出すのが「創造農村」の役割ではないかと思っています。

大南氏：今日まで日本の地方において、集落は血縁者に託して受け継いでいくのが一般的だったと思います。ところが、現在はその地域における世代間の循環が、プツリと切れてしまっています。そこで、今度は「誰が継承するか」に固執せずに、「何を受け継いでいくべきか」に視点を移していくと少し見え方が変わり、スッキリとしたものになる気がします。

「創造農村」とは、地域に住んでいる人と、新たに地域に入って来た人達が共につくる新しい暮らしの形、新しい暮らしの場だと思っています。

金野氏：創造農村が何かということについては、私ども篠山で昨年、第2回の「創造農村ワークショップ」をしたときに、同じように悩みました。

創造性の源泉というのは、「職人の仕事（Opera）に込められた生命の発露」、これは佐々木先生の言葉です。ある土地、環境に働きかけること、職人の技術と魂が、何か新しいものを、その空間に生み続けていくこと、これを創造と解釈しました。そういうものが起きる場所を「創造農村」と捉えています。

お百姓さんは、百の能力があるという意味ですよ。お百姓さんも「創造農村」を支える人材だし、工芸をやっている人もそうだし、その他、お祭り、芸能とか、そういうのも含めて、創造的なものとして受け止めています。

コミュニティの捉え方は、大南さんと一緒です。両義性というものは閉鎖的なものだと否定せずに、大いなる前提としておいた上で、物事を考えます。それが息苦しいんだったら、どうやって空気を抜くか、みんなで考えるのがよいですね。その閉鎖性が駄目だから、なにかふわっとしたネットワーク型で人間関係をつくりましょうなどとは考えないですね。

田中氏：私は、天より地を活かした地域づくり、と言ってきました。地産地消の産業づくりということも言ってきました。そこに住み、地域にあった産業をつくり、そして暮らせる社会をつくらなければいけないのではないかと考えています。

それが「創造農村」であり、文化だと思っています。文化を、例えば、狭く捉えるのではなくて、広い意味の文化として捉える必要があるのではないかと、いうふうに考えます。

佐々木氏：それぞれ非常に含蓄のあるお話をいただきました。あともう1人、お話をいただきたい方がいます。北海道東川の町長の松岡市郎さん、お願いいたします。

松岡氏：来年、私ども北海道の「写真の町」東川町で「第4回創造農村ワークショップ」を開催をしていただくことになりました。

私達の町は、本州の皆さん方の手によって開拓が

始まってちょうど120年目にあたります。創造農村ワークショップが、未来のまちづくりの参考になるのではないかなと期待しております。

もう少し話させていただきますが、私達の町ですけれども、いろいろなものがないです。全国的に珍しい町だと思います。鉄道がない。国道がない。上水道がない。だけど人口が、10年で400人くらい増えている。という不思議な町です。ですから、その不思議さを、ぜひ発見して欲しいと思います。

私ども行政に携わっておりますと、北海道はもともと“疎”で、過疎です。ですからその“疎”に、どういう価値をつけていくかと、いうことが私達の役割ではないかと思えます。そういう価値をつけるというのが、文化であったり、芸術ではないかと思っています。そして最も大切なことは、3つの「わ」だと思います。

1つ目の「わ」は「会話」です。今住んでいる人も、これから農村に住む人達も、しっかりと対応できるまちづくり。「会話」のできるまちづくりをどう進めるかです。

2つ目の「わ」は「調和」です。自然と文化の調和をどう図っていくのか。あるいは新しく来た人と古い人との調和をどう図るかということ。

3つ目の「わ」は、「支え合う和」をどう図っていくかということ。この3つの「わ」が、大切だと思っています。

私達の町も日本一が、たくさんあります。木曾町と同じように。どんな日本一があるか、旭川空港に日本一近い。そして、旭山動物園に日本一近い。ぜひお越しください。お待ちしております。

佐々木氏：これでシンポジウム終わりです。どうもありがとうございました。

*本稿は2013年8月25日に長野県木曾町で開催された「第3回創造農村ワークショップ」での議論をもとに加筆修正したものである。